

H 2 5 年 度  
「患者と家族のがん研究基金」実績報告会  
Cancer Research Funds for Patients and Family

プログラム抄録集

日 時 平成 26 年 5 月 30 日  
午後 6 時 40 分 (総会終了後)

場 所 千葉県文化センター 9 階会議室

主催 NPO 法人 医療・福祉ネットワーク千葉

## ～次 第～

◇ 開会の辞 竜 崇正 (理事長)

◇ 司会・成果発表座長 永田 松夫(常任理事・千葉県がんセンター副病院長)

### 1、『乳癌腋窩リンパ節廓清術時にリンパ管機能温存を目的としたインドシアニングリーン ( I C G ) 蛍光リンパ管造影の有用性を検討する前向き試験』

千葉県がんセンター 乳腺外科 中村 力也

乳癌に対する標準的治療は外科的治療による腋窩リンパ節転移の廓清であった。近年ではセンチネルリンパ節の摘出生検にて転移を認めない場合は、廓清の省略が保険収載となった。しかしながら、腋窩リンパ節廓清においては術後の患側上肢の浮腫は頻発であり、またセンチネルリンパ節生検でもリンパ浮腫を認めている。本研究では、新しい手術手技としてリンパ管の機能の温存を目的としたリンパ節廓清およびリンパ浮腫発生の予測因子の同定を目的として当院の IRB 承認を得て平 25 年 9 月より研究を開始している。

### 2、『微小生検検体を用いた肺扁平上皮癌バイオマーカー検索法の開発』

千葉大学医学部附属病院 呼吸器外科 中島 崇裕

近年、肺扁平上皮がんにおいて分子標的の対象となりうる F G F R 1 遺伝子増幅、DDR 2 遺伝子変異、P I 3 K C A 遺伝子変異が報告されている。本研究では、気管支鏡微量生検検体を用いて F G F R 1 遺伝子の増幅を F I S H ・ 定量 P C R、免疫染色、DDR 2 ・ P I 3 K C A 遺伝子変異を定量 P C R で解析し、検出法の確立を目的とした。検出法の最適化後に、臨床に応用可能なマルチプレックス検出法の確立を目指し、研究を継続している。

### 3、『RUNX 2 を分子標的とした難治性腫瘍の抗癌剤感受性の向上に関する研究』

千葉県がんセンター研究所 尾崎 俊文

siRNA を用いて内在性 RUNX2 の発現レベルを人為的に低下させたところ、ヒト膵臓がん AsPC-1 細胞のゲムシタビン感受性が顕著に向上した。興味深いことに、RUNX2 の発現抑制に伴って、p53 ファミリーに属する TAp73 の発現増加ならびに活性化が観察された。p53 とは異なり、膵臓がんにおける TAp73 遺伝子変異は極めて稀であることから、RUNX2 の発現抑制による TAp73 の活性化は、膵臓がんにおけるゲムシタビン感受性の向上に寄与するものと期待される。

#### 4、『がん薬物療法におけるチーム医療と情報処方システムの構築』

千葉県がんセンター 腫瘍・血液内科 山田 修平

がん薬物療法において、副作用を管理し、治療を安全に遂行するためには、患者の理解力向上が重要である。そのためには、適切な情報をタイミングよく提供することが重要であり、「情報処方」という概念が提唱されている。そこで、医師、看護師、薬剤師など多職種が連携したチーム医療を行う中で、この適切な「情報処方」を行えるよう活動を開始した。当科で頻繁に行われるR-CHOP療法をモデルケースに、統一化された説明資料を作成し、それらを患者に応じて適切な内容を、適切な時期に提供できるようシステムを構築したので報告する。

#### 5、『第二世代Bcr-Abl TKIの適用使用における血中濃度モニタリングの有用性に関する検討』

千葉大学医学部附属病院薬剤部 有吉 範高

現在、初発慢性骨髄性白血病の第一選択薬である第二世代 Bcr-Abl TKI の血中濃度測定は保険適用がなく殆ど実施されていない。しかし第一世代のイマチニブは血中濃度測定が推奨されており第二世代 TKI の適正使用推進のため血中濃度測定が有用か検討した。その結果、特にダサチニブ投与症例において副作用で標準量まで増量できない症例でも血中濃度が高い患者は効果が持続しており、血中濃度測定の有用性が示唆された。

#### 6、『喉摘者に食べやすい食事（ケアフード）の研究について』

京葉喉友会 神崎 和

生活の基本的な要件としての「衣食住」の中の「食」は命の源、人間の活力源とも言える。今回のアンケートにより喉頭摘出後の後遺症や放射線・抗がん剤等による治療の影響による味覚異常、嗅覚減退、食欲減退等により食べたいものが食べられないという悩みや心の叫びが感じ取れ大いに成果を得た。県内在住者には「ケアフードレシピ」を送り、どの料理を食べたいかとの問いには「全てを食べてみたい」との意見も多く、このような料理があったのかとの驚きと発見により食への希望をつなげる良い機会となった。今後も積極的にケアフードの発展に努めたい。

◇ 閉会の辞 竜 崇正 (理事長)

